



七部集

雪中庵夢太考

羽翠

兄聞誌

冬の日尾張五哥仙

岩猿蓑春の日瓢乃内

無門關

白潛居士亂暖序 素秋之論

三鳥

蓼太翁頌

表以下セ一章心得

水鳥文庫

呂公方
呂公方
同書

12分

卷末白紙後天和の以までハ後林風までありを芭翁をして而を冥す東
整てハ麦栗を盤鶴と又如ヒロシタレハ比古の日集の後詩をたゞゆくられ
ひのきの匂ニ有ルトモアミ付コが史を以て附めやう存トトモアラ科とモ後文の後
詩をかくす有ルトモアミ子のまちのもるする於付神代のものし鰐竹籠ノ血りす
かうれなみ瓦ニがりけん猿のからくざあられふふと續け本れども一語して
二局のらユ金毛と含みんと附ををくああふと元室井の鞠のちま考ハ
奉くゆ本をうものハセトナリカムカムスミテキの日ハ正月の余口ある
まつ白体おしまむつりくあて理コかわう毛をそんへ一夕の旅食合の毛をそ
けて翁の精骨を立草又其誠の用物をそ思ふては集正月の禮とちすすめ
撰者中野梅亭の名あくとソシ翁の撰トて利中翁の自筆の抜氏
集をぞそと号してハ集月や鶴のくと並ひおしてとまほその餘り乃翁にう
ヒ五張の秀逸トナリスわらの名の日コトアリとこれ皆此重翁より更
多益便ひ翁を翁の物かうこけ年之日集をそして尾張五色と云

筑波山の翠光志

○冬の日
○翁
翁
冬の日
尾張五色
注解
聚

至て「秋風」あす、果て世の美ニセハヌオヨミテ木のじの音、芭翁は心をよき身
廿歳の秋東西人へ枕果て翁アキメと見(と)と、空の胸の空をよきあれま
を布おとせよ。〔歌〕とぞと讀へし疾走、廿歳の仰るがと疾走り取あらぬの

荷弓

重五
杜国

正平
奇野水

翁
九夕
重五
荷弓

と宿はまゝらんせう。○髪くやさにあよをひいておされた。おと付出了た。
○初夏。髪切る。いとよに半をそろし。刺子まうけた。中も今いかれ。と成たる。
うらとこまよぬ。○宵の卒塔婆。あら乳と絞りきてとむよ。すこえれん。
人とふれてたれ。○墓参りの神。口てしと絞り放す。神あれ。沙若松。○
直て卒塔婆のひとよより。あらむかくちぬるもの。すこえれん。
終り。○葬法。墓すある。他外の食食あらむ。枯枝あとをあつて火焚用
情を付た。○あるじ心こよて、きのふ。学(せよ)き。○しも今日の型うひ
位あじた。おちの破す。焚火の教へ。○表拂(はづけ)られ。おこし。墓を空
て火を焚する用。有て用。れしは。おと。表拂(はづけ)られ。おこし。墓を空
て火を焚する用。有て用。方。於て。○畠中を。小ま。柳。○伊勢山の浮洲と。あふ
有。○芳小茶氏。あ南。伊勢。二万石を。以。○湯を長。○中。次
帰人。と招く。中ふ。一人向。おだち。弟。○麻猿の女。有。氏。あらや。○もし。傍
の人に。彼女。いふ。あい。思ひ。し。核。百萬の錢。彼女。う。と。せ。ハ
是束。か。○おと。既。波男。百萬。錢。せ。り。て。もし。を。つく。あ。す。付。一。令。の。祀
女。大。○收。ひ。ま。錢。と。そ。夫。の。錢。ま。く。女。は。氏。あ。か。く。度。を。い。け。モ。祝。小
遊。血。し。れ。れ。女。か。お。し。ミ。大。一。ね。て。波。オ。と。お。れ。△。お。初。め。か。の。女
男。志。の。切。れ。る。を。廟。○銀。す。遠。を。口。申。し。墓。下。す。柳。と。核。ち。多。の。柳。

荷弓
有用

翁
水野
翁

翁
羽松

荷弓

翁
杜國

翁
翁

翁
安傳

重五

少しおとて辭世オモテテ辞世ハサシテ辭世ハサシテ我を以て人ハナシマシ
 ○隣さかき苑の模モダニの字を替り市中力裏アリの挾モジ支
 宮中もとの里居の尾只一鷹二鷹トキヤウ小刃ヒサギ五つよそ一と唐カタマリ
 乃弟梅と妻林たの事コトもあり西鷹揚トキヤウ鷹トキ山被ハサシタケのを海シマの先アヘンれ
 只祥のこ善シラフまつうとと鼻ヒザシかみ涙クモリかみの老シロの近候アリハシマスおはす者ハシマツル伊野
 又種トキとあうしことち有アリたるあはへま辞ハサシタケられて月ヅキのもの
 をもふせく、シテ監シヤク人の記念メモリ次第シヤクの事コト表アハシマツルあはへむ坂カタマリの物モノの極カタマリ高宗カタマリ遠
 美濃ミノに於上取アシテ小田の庄官潔アシテの邊ハタハタ泉ミネ東北化アシテ室ムロ法師ハシマツル古アシテ侍シテ事コト
 ひばれと寛アシテ之シテの方カタ宗祇ムロ法師姓ハシマツル飯尾紀房アシテ人ハシマツル又自然アシテ有種アシテ度アシテ不
 審アシテ富アシテ外アシテ高アシテと云々久延アシテ二年七月豆州湯布年土一破アシテ被ハシマツル枕アシテの室
 林寺アシテ葬アシテ墓车板アシテ湯半早雲寺アシテの室アシテ改アシテて、旅人アシテの室アシテ室
 あらんと立アシテあたはアシテ身アシテを理アシテめアシテとハ風流アシテ人アシテとアシテ又
 宗祇法師アシテ死アシテ被ハシマツルも更アシテとアシテやうがアシテおあんざアシテいれ動アシテふアシテ骨アシテと云
 了アシテ寄アシテしアシテ○鳥賊アシテ山アシテ骨アシテ何アシテ云アシテとアシテ付アシテト部家アシテ筆ト

卷之二

荷

梅雪之卷

荷

さうさて、ああ、やうやく、又立あきこ。日東は、日本のことと説あれど、又色一又或後芳翁の詩を唐人よりて曰ちの本と白ことひじも、ともいひか。再按、日東を師ひものめによまつれども三考められ付ふタゞもとあれ、日東は、やうりん本といひの説と從ふでし。『中木権』曰、向几土記、景清眼つされ、平家の盛じゆくあじと権在一日の茶うつひ木権を生毫に題させ。毎晝を彈うち、ひ毛崎の漬、食を乞終つ後あるまで卒也。今の大圖法、多く日向の主より出る。累はる後をもじり、や又も中上にちりと云、古詩よゆして風情也。翠見據て権在一日茶とあさみるのをあらわす。翠は、萬葉の集と餘の集を、あさみす。翠の是、向て一子あきをわつてけり。子の代と訓よつて例の理と難め所ある。今日ハ、いもど、官隣をつ妹の孕める。あと肩ゆき、夕食れあひ、肩が下り、肩こり、肩の手、懷妊して肩をあると云。泣ひぎす。寝ひとこ巻そとて、汗をあらすりたつあ。のるやを、けるよ。其のゆく處と辟し、川流よ遊ぶと思ひ。そは年じて辟し。かく今年も雪の際、比まで、やく序りとまもす。子の敵相處、作若壁の、庵庵あのかずて、その人の、寒焼と云へば、けり。やうやくせむ宮すのわあく、小弓を、やうやくほまては、君よ吸あきよ。か字すあく。それから、とあれ、二年、去外よきて去年もとしもくつて、あれ、ま年とよ差別切くち下りゆく。あれつ小弓しけるよ。かくて、ゆるがや、とやとりれ、れりと御く
走れ

本同

杜國 翁立
五重荷弓 杉正平
未之表人名附
格續三季

重五
月
杜
翁
少
三
翁
病
癟
讀
重
力
野
原
林
楚
水
荷
翁
姑
婆
屈
國

重五

荷弓

杜園

荷弓

杜園

荷弓

「おまへうきうき」お叶ふえあることぞ切く所く方く地底ゆけとい他御の用
 いろ斗子て。佐老ノ佛寺とくの間、茶の井水を花嫁をやう
 長者とて。正月の子て達附と云。一白主と云。和歌うたしも白骨と成て
 郊外にわんとあそびを起ね、あがむる娘の仕人を奉事と女童と櫛筆すとて
 併珠玉は充とてそれが柳笛と漫餅房と心根こそありと匂中と隨り三字
 重五の音とて。高室、御堂で起一鳥、ひそゝかに高條拂と庭の風と以て被
 いを依セリ。品井元く、花の木梅を植す。老々とて床足と甚を思めくら
 ども志うちことよろい。高室加の主と人せかく次第と想うひては世をたゞふ
 れて主をさす。まへあへ寄附するに付。唐輪笠。唐兒の髪をぬく。番をす
 ておもてん。心せぬ店、老婆禪也。勘處去。婆曰。暮直去僧続。趙州勘婆趙州因僧問婆子臺山路
 後有僧舉似州。云。待我去。与你勘過。這婆子明日則去亦如是。荅
 州歸謂衆曰。臺山婆子我与你勘破了。也付何ん。一說漢土の習とて老
 や子と御機と纖縫衣とてはつと修了の世とて了。說あれといひ。秋蟬
 四季あらゆ。枯木裏龍吟。髑髏裏眼睛。玄賀僧都歌。元和ノ也
 荘のうづれと。六月の山吹。一石を走れ。爰の遠。閑度と付す。夜半
 六分室極清妙。夜半。英達玉堂と云ふ。山古のをの後をと見て。更越て寔

「おまへうきうき」お叶ふえあることぞ切く所く方く地底ゆけとい他御の用
 いろ斗子て。佐老ノ佛寺とくの間、茶の井水を花嫁をやう
 長者とて。正月の子て達附と云。一白主と云。和歌うたしも白骨と成て
 郊外にわんとあそびを起ね、あがむる娘の仕人を奉事と女童と櫛筆すとて
 併珠玉は充とてそれが柳笛と漫餅房と心根こそありと匂中と隨り三字
 重五の音とて。高室、御堂で起一鳥、ひそゝかに高條拂と庭の風と以て被
 いを依セリ。品井元く、花の木梅を植す。老々とて床足と甚を思めくら
 ども志うちことよろい。高室加の主と人せかく次第と想うひては世をたゞふ
 れて主をさす。まへあへ寄附するに付。唐輪笠。唐兒の髪をぬく。番をす
 ておもてん。心せぬ店、老婆禪也。勘處去。婆曰。暮直去僧続。趙州勘婆趙州因僧問婆子臺山路
 後有僧舉似州。云。待我去。与你勘過。這婆子明日則去亦如是。荅
 州歸謂衆曰。臺山婆子我与你勘破了。也付何ん。一說漢土の習とて老
 や子と御機と纖縫衣とてはつと修了の世とて了。說あれといひ。秋蟬
 四季あらゆ。枯木裏龍吟。髑髏裏眼睛。玄賀僧都歌。元和ノ也
 荘のうづれと。六月の山吹。一石を走れ。爰の遠。閑度と付す。夜半
 六分室極清妙。夜半。英達玉堂と云ふ。山古のをの後をと見て。更越て寔

鳴

久松
服重五國
男翁水

荷正平
重五

杜翁前
郡水今重五
翁前

○登々處レレカシ、水を踏てひゞ仰、外稻妻カミ、アオニ、トモアホの
十月の風情、又初寒と見てもおれどこれで、季節にちつて表す、うはし
ゆづみ、涼今去合ふ、し一送秋字す、うそと、心のやうざりたつ方とぞ、くわゆつた
御へと云説あり、もと作形寫る余効也。『雪かんづ』、つちの掃除神也。『茶の湯老』
御へと云説あり、もと作形寫る余効也。『雪かんづ』、おとと利休かとえて、お娘が迎
付へらうたけど、うつくうと、よわくとくや、房の字をすし、争すれ、くまひれてよ
写しもの、瓦うきすみすみ、かわくとく、あきらめ、物語ふと男子とて、小兒
うそと、用うそと、げ湯うそも、一。『灯花一山』源氏物語の傳、吉井のア、説
不芳・錦木の夜歌、アソヒ、火、猿を提して、奇林良材、うそ。『遊遊社』
木羊すあれり、ひとひと、春のすまかと切て讀む。『遊遊樂』山林国宝、格
乃名前や坊、旅宿、誰を作也。翁がとせじ、春季か、共難御、六段と有て
雅之、今帰也。彼離作也。今ゆり、まつうの、鶴物。今帰林、松、松中萬山侍
不老織物、是も早余帰也。『巖主』翁の米あと、猪、もとお換たるの
足と、お付たる。『仙くよな』吏師の返、曰、若證岐玉乃浦、餃つ大魚上
ちよに恵心、僧都の作、佛像を脇中す。『東山』、す有、と、魚殿松
をゆくと解り、ゆき、一送、淡石志波浦、長田作平とおも、と云。島花江
次郎、若日向女、何次郎、うす、私寫たるもの、布の、を、沙汰も、起

セズキと名づられた。有其後也、次第、と、ゆく。と、次郎との名の
めつて、けいだまふこと、吏師の説、堅す。田舎子、うそ。田舎子、
根、五形草、故荒野詩云、碎米蘿、舊蓮花、五形草、うそ。解公事
ちり、度て、遺す。ゆづるを、うそ。吉堂の、言葉す。物語と、ま直、笑て、咲る。
乃附、寒刻の機、三月苦海耶是時、召峰、寒刻の長、うそ。『雪かんづ』、
らば、左寄松、あると田舎子、うそ。あと、と、
中古世の、志、かね松を、旅、亭、高を、とめて、入、と、脚あがみ松、亭、保以、枝、未、
よもやう、うそ。又、おと子、と、憐、と、迷、うそ。娘子、立ふ、と、まて、成、うそ。
法製の、ひき、うそ。而、口を、山、子、おと、枝、子、おと、山、子、おと、
室の、子、笠、亦、と、活、連、詩、毛、え、と、付、う。惠、宮、詩、笠、寒、吳、天、雪、鞋、者、楚、也、毛
ハ、伊、珠、帳、す、は、な、と、你、ふ、人、お、達、て、づ、ま、あ、ま、と、脚、否、て、ま、う、れ、す、し、お
を、う、す、て、看、死、と、死、生、と、生、死、と、棺、せ、艺、と、滑、稽、と、名、子、の、ひ、と、お、の、故
方、ハ、ゆ、了、と、窓、つ、す、と、故、生、名、の、名、と、早、之、と、全、置、ち、と、て、と、
山、念、仙、の、名、と、生、死、と、引、き、と、度、と、観、一放、生、会、の、起、し、と、お、と、見、て

也三十多勇て方々一海士、遙かより來り。は上まで十三年と有日、婢をも

札記曰人生七年曰幼学二十曰弱冠、三十曰杜甫堂也。前三十と却て付た了

セタから作西南也。七日の月の夕也。而そつてあり。は、草の油メ木と余る。引

とくに十沖とよき。一説ト本を養木と誤ての説也。ひつて、残れ。是の油をとけ、之あき。誠に賢やふ。と付し。約をす。撫子^{うなづき}。是の栗

の油をとけ、之あき。誠に賢やふ。と付し。約をす。撫子^{うなづき}。是の栗

主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉

杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉
主玉

杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國
杜國

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁
苗翁

卷之三

卷之二
聖人傳
岐阜山流石原乙郡也。云稻並山。比累。汝孝生也。始買。自東京
表。立名所。章。根。か。さす。付た。表六章。慈。名。不。あ。と。表。一。牛。の。溢能。一。表六
章。立。奇。仙。一。卷。と。縮。た。こ。表。八。立。章。有。准。と
○猿襄太意。猿襄太意。在。山。の。仰。詠。歌。あ。り。す。と。理。屈。と。放。れ。け。集。よ。て。安。情。調。を。詠。な。
其。自。序。も。え。猿。四。年。幸。キ。の。友。差。ゆ。の。高。持。今。い。じ。よ。接。そ。て。け。ひ。の。體。と。あ。ま。之。
之。の。ひ。今。古。ぞ。た。」は。集。お。い。仙。釋。の。古。た。事。こ。と。よ。す。と。心。よ。こ。う。と。立。た。歎。

章
豪傑一卷を編たゞこ表ハ立章方準と
其角序
註記
豪傑大意 在風の仇説漸あゝ生まて理屈を放れば集玉と次安清調と讀
もしえ孫算幸ホの友嗟味の高持全引ひてお撰玉とけんの證と云々^モ
もの古今子古、うだら】は集玉、仇説の古たはきことよすを心にうて立たせ
のことを守護と題す画、舉白集つる、衣の文の内月をの面起すをもすあれやく
見しと能て仇説の面目をいふて五德也。いやくとそ矣コナリトナカニトガリケドウ數多本イ名を知る見るもりと
いふとくとてめの外、庄内五箇一秋、傳有骨、骨玉と化し、而擇集也の外中、序すを志あ
サムモリ骨もろ人を作れし者、是より人擇集也の外中、序すを志あ
はく序オノヒトク伊賀越中より又ゆきを方師說て尋口傳。猿と小裏也
此監序註記ま似事も、裏アヒテ、仇説の精神内面の姿情よも考ほして之を教へて子はの
其角句
内之の毫字眼にあひて、又ハヨヒトガリ、江城南毛岩下、松原急山、守敵臣久松
千那向
甫山亭テヨツの即日、こ含浦山の峰、對立する。愚訓伊太々、そけは湖
内口ヨミト、小島也。柳右衛門老、彦九郎、額云數音、今安泰、僕水蘿是也
新接上、鏡曰妙伊佐々古、廣辻、山城國葛野郡池浦村、有又遍照
史邦古

尚白与
男良与

其角母墓表注
符

別傳
藝人向

仙化与

凡兆与
千那与

前文兆与

去未与
卒入与

起与
衣笠左大臣

翁与

婚則祭祀必戴金錫奉神矣不幸於壯之間為孀則不得已而改嫁焉再嫁者用二枚三嫁者用三枚候神幸之後也。棕也。淨氏幕末卷曰斯麻一
之也。ちをたてみえさみかちよひうあきソシレムヒトミツチシナタヒトヒウミ
ヒテス。ゆくつてきくまのゆくゆく物語の姿アリテ淨氏のうちの体ヨリヒテスモア
ユ希の即血。ヒトヒテ大坂討死。度長三年正月五日。大坂落城。六日
乃至忌。後堂和泉守。別。津。一。翁。堂。新。七。郎。見翁。翁。古。主。二。夏。草。也。文。治。五。年。宝。晦。日。高
館落城。御。湯。水。經。共。宗。從。郎。等。自。殺。レ。懷。田。二。飼。屋。下。三。大。細。ヒ。エ
出。羽。尾。花。ヒ。テ。之。暮。一。翁。古。主。二。夏。草。也。文。治。五。年。宝。晦。日。高
百。番。寺。合。三。山。次。の。翁。古。主。二。夏。草。也。文。治。五。年。宝。晦。日。高
万。番。大。軒。裏。鹿。火。屋。下。雨。鳴。蝦。聲。谷。聞。者。吾。將。烹。火。於。全。志。一。射。萬。火。火。屋。故。火。屋。說。翁。氏
鹿。火。屋。說。翁。又。翁。古。主。二。夏。草。也。文。治。五。年。宝。晦。日。高

日。有。國。於。蝦。牛。之。左。日。董。氏。右。觸。氏。爭。地。而。戰。也。美。方。之。戰。更。在。名。那。笠。
鳥。造。祖。神。社。附。笠。島。小。鹽。手。村。ト。近。而。附。上。三。兵。工。主。者。勝。ア。リ。美。

今
翁与
翁与

翁与

是エ、寫家アーティストの事也
の内をとわ
支考は是へ酒を口數せり故て信せしもの多
もじゆゆる堅用ひて為ニルを以て其事凡兆ヨンハ
去來、病ノセシム凡ルハはさうふとる病ノ、余後方テモ多くソシム其
形ノトキ先エシ似た事多々有る眼前の事すテを倦しに集撰のみ未だ
翁も之モ起て加メし凡ルを控候事多々知テ(○古事記ヤモリ)寛寧御

尚向う
駕門九号
もた小レを例シテ今ノコモレと申す古事傳正の】
弟吉も出でまし居今
峠葉弓
狂多丸の窓戸門は一戸也あが一ノ戸めの旅屋とて夜も改まつた
安やすりてしき、うへ 黄鮎キツナニちり米あら美ニ鱈ハツナセナリ 和名抄云鱈音
客和名知々加布里 似鯛魚而有黒點也この鱈ハカセナトガ一鳥不鳴
王安石鐘山詩 嵩巖相對坐終日一鳥不鳴山更幽々、寂寥矣哉。社の事也
○宿枕金、去来の嵯峨別業ニ柄うちのき崩山と名むる山嵯峨の名也
峠葉弓
神ゆれ、レ李耽大已貴并平紀王將門冥、レ魯九月十五日、
乃友こよて歎て歎てひゆえあらトモをもと之象と云ふ
跋足

初
骨
四
行
刀

如行句

卷之二

江戶傳人

卷之三

越
合

山川考略

樟句見矣誤

白車未有

卷之三

翁文

卷之二

卷之三

卷之三

羽林前集

立たる云々徳を安へ近糸ぬ山あひはまの山にたつも皆、有むる在り内大臣は醫の木を
たゞより幹と底に枝をもて縞と柳の綱の如き。○樟の宿也。催馬乐も
沙屋上たてて白玉橋玉神と云。白橋に玉の宴。翁紅去来の婦も鶯の色
豆、其處御歌「青板とばかりよりて嘗めぬかふ葉、板を笠に荷て馬車板田も
柳とぞあそぼうて叶や青も青や、瘦骨もぬけり。笠に柳や柳の毛笠也。翁の行也
里通し山高萬歳。和爾牆根葛と葛下是海三郡山也。是神言主命也。是此神乃
向、美育みきと、此より之を喫す。嘵よ、狂人たゞとの仰得なり。在塙の塙、上東
門院南野乃へ立櫻をうちて柱さくとあじよ鳥羽寺乃爲住止。樹々哉等の具
木心も命くとも叶ふき。ヒトキヒトキヒトキヒトキヒトキヒトキヒトキヒトキヒトキ
花^花の庄^庄に於^於之砂石^石生^生る事^事。○[○]す^す。○[○]す^す。○[○]す^す。○[○]す^す。
後^後世^世至^至。年^年う春^春元^元正^正。ハト云將軍大ニ感レ玉ヒ考^考ク是^是ハ行^行シ今ニ至テ寺
中櫻樹方シトス。○花^花も勇^勇也。後^後考^考ク是^是ハ御^御院宮^宮也。○[○]たせは林^林也
之小^小以^以初^初て花^花もよしの山^山。○[○]山^山也。江府少^少郊^郊有^有大^大田^田在^在川^川大^大原^原持^持
入^入也。○[○]出^出張^張之^之地^地。○[○]上^上五^五字^字名^名所^所也。○[○]前^前之^之源^源也。○[○]御^御木^木脊^脊
有^有明^明也。○[○]考^考ク是^是ハ^ハ有^有月^月也。○[○]考^考ク是^是ハ^ハ有^有月^月也。

白兆子
智月句
式之句
乙州前文

伽藍の起、樞名也。伽藍の荒原、木ノ子也。又曰、碑、山上寺
ノアーチル(墨子也)。碑之の有也。碑之、仰山、唐名也。木曾邊
仲圭、在寺、永三年四月、從四位下左馬从善(字子良)、源義仲朝
臣西家、使ノ石工、討死也。遺骸、と爲コ埋ヒタリ、忍野朝卿生時、去良馬
ヲ佐ニ木高綱、賜フ、嘗テ於阿刀勝浦、斎化ノ為石、土塔、呼曰石馬。後太
平記、見テ項羽、烏骓、罔羽也。免皆暮也。死ヌ是等ヲ思ひよせて作リたる也。
近は人、はるゝ事、御の庵ニノ今、もかゆつ假サヤ、立上りす。

附合

猿
狹
長
五
卷

美耶
史那羅

おまかせ。おぬは沙羅の里さらのさとをすみじよおひの細川を跡へきる
ゆくは道みち、庵有誠庵有誠、志ひ志しひし、又古いそたるあをる相子あいこ、木立木立、
たゞうち、下りてヨリモヒーと垣いはと柱はしらと木きと石いはと土つちとみの

聖史却

史邦

卷之三

史邦

金史
邦札

九
九

卷之三

亦文子謹力

隣をのぞくは氏の御内蔵の卷、大式のめのとほりてつらひをも車の
一きつ、さへあらね、今こそ惜えりせむせむひる。もじゆりす
おち御のさあまくじゆすまばはみのかへりよ移せとすのあじう
とて車のうきと、あひ思ひ思とけもる家くもれ我づそあるす
をよすはまくおやのゆきゆかしもまよ故お骨れあらうとく
こく塙もくらさんとあくり引のひ多うとてアナリ生とまく
め又のああいと見るの作考をとせ死の由考の既つて既
ト御引てアラキのきちらぬあるとゆひつて既ましとほる
逝者と静がある、在りの死と云ふおれ、帝へあまこうめはる
ヨリテテはぢの左の物音と申す。是まの戸也、居考のきゆと存だ
伊留村主、名をもとく富士山よりはまく秋までまだせだ。富士山

翁中夏刀
月，癸
翁去未

卷之三

1

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

集

一ノ割のよか也。師說曰。蜀之大邑也。傳名久矣。乃於毛本綱曰。蜀之
 二方根。深大生苗。作最高三尺肥。至絲葉。五六月。而其根如蛇牀。
 而色若桔。實大如棗。粒徑而有細棱。俗呼為大蜀。下署。季。八月
 地。正居年。重之地。代也。而。年。重。材。年。貢。ナト。立。明。智。京。郡。ノ。地。ヲ。ヲ。セ。シ
 ヨアリ。蜀。ニ。カ。の。を。而。つ。う。角。の。ば。る。ア。レ。リ。而。こ。ふ。一。た。く。セ
 一。と。均。一。そ。れ。と。直。す。レ。ソ。モ。齒。ヨ。ミ。岐。み。附。ル。コ。ム。ヒ。ア。リ。ト。よ。キ
 あ。ハ。齒。不。用。ヒ。テ。汚。ア。レ。ソ。の。つ。う。ひ。キ。ア。レ。ト。吉。集。越。ラ。カ。ア。レ。ア。リ。ま
 り。蜀。樹。の。命。ア。レ。キ。西。行。被。固。ア。ト。の。而。利。考。機。車。ア。リ。界。五。石。ア
 ト。惟。梓。枯。槁。の。塊。と。脚。と。浮。世。全。皆。引。ク。ア。レ。ソ。一。皆。曾。道
 有。し。猶。是。集。氏。而。玉。て。よ。き。運。ひ。シ。そ。ケ。ア。レ。ア。リ。レ。ソ。一。皆。曾。道。
 ち。の。蜀。之。也。附。其。人。主。て。身。の。一。蜀。之。也。附。其。人。主。て。身。の。一。

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

ふゆき首を利くるの金錠刀腰の物を常うててみやの人の人を西宮
 おもむき立たふはあひだ西宮の名の色をすと杜根じたる赤葉塗、墨葉
 乃葉。赤子匂きめやまの名ふと能人と堪たる。はあひと山、思ひ
 ほほとほたる向のをすれ。あ淡こどきの志をこ古き井あひ冬く波浪
 脚はあ深のうりと。附がみ井とくの字あ極はる。花の空壁は山と
 楊白花、楊白花の事は三日咲ひオとをうの弓をもせたる松枝
 桜さくらの事はめで京物の物語すとそけぬまし持めやと川移
 一株やわ花は三段切也立せ。宿は立あらかまと。幼少のちをの。穿三、穿る
 三段切してつまうそれのオニヤドリ。若れをえはせは山と方ナミの松を
 よ時りての子の字とも限らず。食はる事はと。波食、又米餅、云生糸と
 云の高葉。極き病ゆすやうした。あはな化け。三階の者、若者をもて
 今由葉や一ふとけた。放ちゆ。若者をい海をも御坐たるをねぢやと
 一石放生多ニ。放ぬに。石け法ゆまへねそりて。波食山と越えよ。國
 か山はせとすまうすうもと。いづれか身か身ある。内花込ばは附花隨
 と云て。やゑ附花は四度の殿之をもす生まで。太子の時波と生れぞ下里
 郡水

表玉齒

素男

乙辰

素男

○箕手陣は内蔵院とふと陣中の弓持うち當方小西持は弓
 正秀考来沙野と高春の日止大船若松は舞てゆき、君をも。供の者罗衣
 紫方半残もと。弓を射てゆき、候女から弓を射てゆき。弓の矢は
 蔭半残乃と。弓を射てゆき。弓を射てゆき。弓を射てゆき。弓を射てゆき。
 国川嵐第一。白家の人の弓を。弓を射てゆき。弓を射てゆき。弓を射てゆき。
 方本々。○弓の弓。夫木。弓を射てゆき。草をいづゆき。弓を射てゆき。
 ○入一弓。弓を射てゆき。弓を射てゆき。弓を射てゆき。弓を射てゆき。
 宮を射てゆき。弓を射てゆき。○支考文揮西行の歌全文を口あると。○想吳楚東
 連杜工美登岳陽樓。吳楚東原折乾坤日夜浮。東漁浦。浦。湘浦。川
 ニノ名色楚國。永江ノ内洞庭半潭州半岳州。中華山水勝地也
 南蕙家語解。舜彈五絃之琴。作南風之詩。其詩曰南

晨

夙之薰兮可解者民之愠兮。○田々早苗
もとあそましらの傍か。○もさゆ山海川大セを下す不二川た畠上山
猿スルヤマあ天安巣に長附。お付くより。○黒は里。甲斐郡名也。○ほまあさひ
ノテアシル。旅亭にて是津御子列記。○網代道。指多ふ万葉集。○
乃木山のあく。あきよ。○山根のゆか。金。山。○とある。あはく。○
宿の棚。文選避暑詠。精明の展體。經會日山高祖大山との事。○
くく山。○多寫シナ。○波金。○あり。むかし。○西の三字。○巖
多写。あやまち。ある。しの。た。き。○あり。まつとも。○山。巖
すみ。ぬくとも。○つりあくも。○とめ。○うす。あつま。集。○ゆだく
コ。似。○國画。莊子。圓。兩。同。景。○襄。子。行。今。子。止。襄。子。坐。うす。起。向。其。無
情。搖。與。景。○吉。有。待。而。然。者。也。○農。愁。○雲。谷。雜。詠。朱。晦。庵。朱。徳。野。人。
載。雨。未。農。未。日。已。參。此。意。良。已。勤。感。歎。情。何。極。○屏。去。莫。猶。東。林。深。山。路
黑。○病。え。人。今。倦。○司。馬。相。加。亦。と。の。ひ。と。度。逾。○から。の。文。勝。七。吸。了
似。て。甚。玉。大。つ。一。卷。○寢。杜。瘦。○李。白。贈。新。于。義。詩。同。借。同。因。何。太
瘦。生。口。只。為。徒。前。作。詩。首。○寢。杜。瘦。○梁。民。推。玉。○分。中。も。む。行。と。た。ま。推。
古。宇。女。方。○賢。男。又。覺。の。ひ。じ。う。も。如。下。う。

若年々、

棲菴附錄
几右日記
大水の
青葉の
里東方
笠史邦
佐加行邦
食土造
田山尚白
扇。玄石
○墓下尚雪
○少。別。卷
注解
碑。李。唐
予。夏。湖。春

幻の極。アリ。○と。か。ひ。捨。ト。シ。飯。タ。リ。あれ。ハ。吹。く。○致。ト。ツ。ヨ。ロ。の。此。事。お
の。レ。ウ。幻。の。タ。リ。ふ。く。モ。ヤ。と。か。ひ。す。と。ア。如。是。各。事。○あ。れ。左。ヒ。ミ。ヨ。ミ
の。レ。シ。ム。の。タ。リ。タ。リ。う。ム。腐。、物。と。活。き。格。チ。エ。加。ム。○る。な。ひ。交。替。極。之。多。難。
子。ゆ。る。ど。も。○と。ん。殊。○あ。る。の。う。う。物。と。あ。そ。レ。シ。ユ。メ。○み。の。30。文。字。空
一。か。せ。ま。や。○元。右。記。是。よ。あ。幻。は。萬。の。日。泥。於。其。地。其。部。と。泥。る。作。キ
可。考。及。○宥。中。之。ア。セ。テ。也。○禁。忌。泥。空。下。下。下。下。下。下。○晴。○お。す。き。
油。ム。鉢。也。一。向。宗。ヨ。ト。古。く。と。き。柏。の。屋。よ。と。と。ふ。ん。と。こ。う。山。君。の。寂。を。ふ
わ。シ。○晴。○三。船。日。又。仙。異。○と。ど。つ。ふ。か。の。累。う。き。○笑。笑。笑。笑。笑。
越。の。菴。蓋。と。者。先。捨。室。の。瓦。と。あ。う。○と。モ。ユ。米。の。也。翁。と。め。竹。立。食。
け。○云。糸。コ。心。功。と。て。矢。と。き。之。拂。を。あ。モ。の。拂。き。う。ア。テ。風。流。子。と。む。沿。ち
と。更。色。古。活。○ち。も。白。○山。城。○高。上。山。○は。州。西。本。大。那。ア。リ。幻。仰。模。の。は。方。
峰。ニ。猿。の。ア。リ。○ア。リ。名。づ。く。シ。ミ。ジ。ス。ニ。モ。○鳥。船。所。屬。○ヒ。川。う。事。也。翁。は。花。
鳥。の。不。と。○南。少。之。存。未。す。○没。レ。ソ。接。た。る。○碑。○催。古。古。モ。碑。而。零。
車。空。夫。ト。ネ。ヒ。ス。ト。活。レ。ヒ。ラ。ウ。ト。書。ア。立。便。の。ガ。ア。○と。○後。拾。送。集。
中。至。致。味。○梅。香。セ。梅。之。花。白。セ。梅。也。梅。也。清。セ。○花。亦。モ。う。と。但。作。

李見桃園

輕

之

の機

○平賀好平あつてやるのをもとむ

正直

浦

本制

の機

の

下西軍記年號の種多の名前禁字にて、形様の生の持てることを

きり
見る
大黒書
主五
田夏白

○下西軍記年號の種多の名前禁字にて、形様の生の持てることを
きり
書く作てをめ放あらひには被造司員あんとまよ女郎てての被
カニヨカミトヘノ命婦の書け。前包ラ銀とて屋主せや。御妙一

花立
夫松家
房前子
五郎水
サ桂

三育あ
其日
百子

○源氏方表底は兵令婦より娘國更に黒保浦之の作平野空土之の
筋毛心姫の行者とす。舞の腰うゑへの作の孫陀公を以てす。右

○左の記の上に匂取り大の碑世より千花の都へ魂而行を一とそ
又あるこの月の秋風ソと云ふ言又考。○前文裏
○疑波人あし火焚木灰ソケルとあり妻アモ床タラふれの處。△附
ヤテ法ハ對。○第三。珠ト骨丸也上モ花林と反手を走。花林
とあてて。骨の事と曲筋をひけた。○前文三件位納。○別
花荷子
花翁
○あじ色と
○舟首云
○微交羽
△下前可見合

○左の記の上に匂取り大の碑世より千花の都へ魂而行を一とそ
又あるこの月の秋風ソと云ふ言又考。○前文裏
○疑波人あし火焚木灰ソケルとあり妻アモ床タラふれの處。△附
ヤテ法ハ對。○第三。珠ト骨丸也上モ花林と反手を走。花林
とあてて。骨の事と曲筋をひけた。○前文三件位納。○別
花荷子
花翁
○あじ色と
○舟首云
○微交羽
△下前可見合

田夏白

○聚

△冬日
再考註
田夏白

○再考

田夏白

△前見合

○再考
金野水 銀鑑

春月山鷺の巣

鷺が巣
間更曰

沙明集「吾の中を掲げて其に懸る也」と號す蓮生
塔六十を三尺也。初といふと、よりもあらかじめ記す所たるものと云ふ
たりはく六十と云つてハナミの男にてやハナミ見たことなく僅を

あるが、おまの。間更曰を掃を躊躇ひの掃除と見てその巣を取は
奉貳のあらじの勾子尉も時頃の匂ひがんとそ、於物の巣匂ひの祀
ヒ格とむ「その日一部の孝勺とて猿の笠の山茶とて匂ひの祀

あらじと候すたもの。」追加指大すあらず。間更曰は耶牛追跡岩
乃所も至州令津を頼りと送りあつより、と牛の劣れ、處とて宿を
ほひの處をとめてゐる。」○前題所載山家の件にて宮めつて安らぎせら
うとあるをす。是が後付で岐阜山溝の眺望をみて氣色を充々たれ、附註春
の月不地名生はす。草つるを一月は全於處にてせ如○跡跡を加へて六人より
夫を表斗加へて六カ月とけ、とけ、とけ。目次帳をと人との一月清か納み
夫の郊外足尾村別荘ア白氏文庫寺立架三弓竹草堂石階松佳竹編場
李凡
○文王のモヤニ運を以て、聖代の運。御所よりて治也、世を守る
伊々と見て、後の文王の行は、林と云ふ。第三と云ふ。スカラスカル
第一初うわきを室。日本紀曰仁德帝西十三年百濟ノ王子泰酒公南之義道

國更曰
追加卷 荷子

玉五

答一地名
進表平格

春の日春
前題
竹編
荷子

白山事
春の日
経醫傳
統本

春の日
経醫傳
統本

越人

荷子

春の日
越人

春の日
越人

春の日
平八郎利雄

春の日
足下杜国
まう御霞

春の日
越人

春の日
江雨

春の日
江雨

也椎畠^高、時常紗ラ軟^レ故太恭^高、姓ラ給フ^レ、至^リ、ち^ハ便^シ、妙^{アシ}、子^ハアキラ
廿五年の者の字^ハ成テ、^リ、^ハて、^リ、^ハて、^リ、^ハて、^リ、^ハて、^リ、^ハて、^リ、^ハて、^リ^ク、^ス、^ル、^タ、^マ、^ム、^タ、^ル
内侍の撰^ハ、^セ、^ミ、^キ、^イ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
勾画の内侍、義貞^ハ別^ア、忍^ハ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
廿九日早^ニ、若板山^ハ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
岩木^ハ、九^ニ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
芳^ニ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
野^ニ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
^ハ中^ア利雄^ハ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
春の日^ア、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
足下杜国^ア、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
まう御霞^ア、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ

人^ハもち^ク付^ク、人^ハも^シ付^ク、人^ハも^シ付^ク、人^ハも^シ付^ク、人^ハも^シ付^ク、人^ハも^シ付^ク、
年^ニ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
本^ニ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
眼^ニ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
眼^ニ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ、^タ
魏^ノ駄^レ、我^ハ大^ニ駄^レ之種^レ、我^ハ種^レ之成^ル而^ハ其^ノ堅^シ也[。]自^ラ拳^シ也[。]剝^シ
之^ハ無^レ也[。]其^ノ堅^シ也[。]大^ニ堅^シ也[。]告^ハ其^ノ無^用也[。]其^ノ堅^シ也[。]其^ノ堅^シ也[。]
於^ハ用^ハ大^ニ矣[。]今^ニ有^ハ立石^ニ駄^レ何^ニ不^シ也[。]以^ハ大^ニ駄^レ而^ハ浮^シ于^ハ湖[。]其^ノ堅^シ也[。]
容^ル則^ハ夫^ニ猶^メ有^ハ蓬[。]心^ニ之^ハ也[。]又^ハ元^メ穆^詩、畫中天地乾坤外[。]江雨^ア、江雨^ア

巖傳上
翁翁

荆山男

乞ね候
松風喜喜草
支考り

八歲
雨生
山居下卷
せき
孤屋鳥

人定とせに歎の致を作りて曰、「猪子の池へ我をも蓮あしもふるはせきみ

1. 本からて羊稿し、太和お達す。かの三毛けも山乃ほく、えれ本つん
幸もあらき、「夜夕後」。柳也小麦。林ち見風玉原足取コアチ以十五石。信
仰證の時後ち因入而高と康元也。れどもへんか法リ記。いのそくあると見て日
ちのを手にりか予り。之の構はうじ「五え」。貞子の絵の能を記。正哉
此もと写めゆき。此之の構はうじ「五え」。貞子の絵の能を記。正哉
七月九日。すよまよよ残か葉が一スタノマモも落め。すれども初秋の如
き。の日本にてのこひ。梅はもじみよるひてと、比持印うてあ
んた垣に漏もとあぐれりて。君のの梅づつうて折し。もと
ゆき。久は老人院所唐中を多く節なら。深山居士。のとし新の里の義
やうせんをめやをちよゆまと写ゆめ。端坐詔ひをもすねに角。へや
つむくまくとあめせれと。穿行く「」。もあすの、浪のうぶ
はい木で。あくにじ。のまほ。能因。の。来來是。かうさきや、能因。
ほは單のめやすさもくじ。の。能因。の。能因。の。能因。の。能因。
出でて。もとひもとをうちあつて。やうて。の。富士島。の。吳楚東

○猿書卷六
翁翁
記文章

○幻竹翁
翁竹翁。の山の妻白石栗の夫。翠微。唯一。勇士。若清外記。剪
さす。幻は老人院所唐中を多く節なら。深山居士。のとし新の里の義
やうせんをめやをちよゆまと写ゆめ。端坐詔ひをもすねに角。へや
つむくまくとあめせれと。穿行く「」。もあすの、浪のうぶ
はい木で。あくにじ。のまほ。能因。の。来來是。かうさきや、能因。
ほは單のめやすさもくじ。の。能因。の。能因。の。能因。の。能因。

前記

南杜子美岳陽樓詩。○浦湘洞庭山谷得惠宗。一満。ト湘ト川。二。○南薰注解
内里甲賀郡。うまく。のう。と。夜。な。旅遊。と。くろ。は。の。う。と。か。う。あ
名。セ。の。れ。文。選。一。○海棠の巢。主薄峯。王翁徐公。山谷集。二
除老海棠巢上。王翁主薄峰雲。一。○舜僻山民。展顏。空山。風
玉荊公詩。と。く。の。情。の。西。行。上。人。一。加茂。甲斐。賀茂。初官。藤木。甲
斐文字。放直。ト。号。ス。慶。安。寔。文。中。施。書。農。詩。朱。文。公。詩。國。兩。は。官。鶴
命。仙。翁。祖。室。惠。能。禪。師。目。ヶ。一。此。一。き。ち。よ。の。乐。天。ハ。元。禪。寄。樂。天。詩
天。星。辰。敷。地。鳥。江。上。清。风。山。同。明。月。嗚。呼。禪。也。佛。也。是。教。師。所。以。有。無
門。闇。之。作。矣。或。向。曰。子。胡。亂。指。註。辟。闕。時。向。外。不。曲。子。說。禪。乎。說。佛。舌。持
下。無。忍。生。佛。固。有。酒。壹。並。漫。休。指。公。前。之。錢。五。山。羣。土。雪。蒸。飯。古。仙。堂。而
尤。屈。天。而。未。會。為。佛。不。惟。眉。毛。親。譽。一。句。日。面。仙。日。面。仙。旦。近。是。禪。數。
佛。數。看。看。由。の。口。や。形。こ。來。て。死。て。行。咄。
宝。僧。主。孟。冬。白。潛。居。太。崩。暖。序。

嘴。咬。走。有。

嘴。禪。言。

七部集外

○無用集。一。
別冊ナリ

古池句

孝雅古今律言考芳山若曉山集二行引句。歌と
して生す但一役の古池とをかほし、行姿を叶ひ伊はま是不老

○洋 延年
次做子果

○会々會
化へ咲
所本傳
書書。眼方
假使也

其角翁ニ写て白山以やの五文字をきて筆者せへし。翁曰汝ニ立て。前也案了と記
コ前でハ不可とと宣ふ。洋曰予考古國う風洞をめんとらむ。山川よ年守と尊
夙夜を以へとす。古池より筆者よ是ハこれ。迎翁後高の洞よ主内
して夙晴の時のちに天下の優游をつぶ若ばくとあくすらうものもあくく。傳を解して
知りた者す。古池の變り改め解をへぐれ。解をくくしてて
内す事。高す事。てあく。う。傳の日行くして。記の事す。あく。も
てえ金波をあく。古。奇。匀。と出めぬと出くすり。音三音も皆
是依草。附木の積方。只日數。余考。優游の中す。有ある。の眼前の切
合。优游をあく。をあく。是人笔あく。妙う。而て修。修の日方。う。以。或曰。寫却て
其。足。走。是誰。お前。を。言。寫。是。テ。立。○非有。狀。蓮。二。疣。ア。て。曰。仰。游
カ。と右。す。あく。げ。す。あく。け。を。序。列。の。中。の。考。列。を。和。下。○洋。曰。生。あ。あ。い。れ
有。あ。れ。前。を。非。有。又。あ。也。曰。谁。被。け。を。舍。す。也。曰。一。表。被。れ。が。り。頭。長。三
ユ。方。を。き。れ。く。十。万。ハ。キ。の。麦。富。麻。島。つ。み。あ。ふ。子。供。の。大。や。安。も。ち。下
九。地。曰。麦。富。麻。島。も。よ。く。ち。来。曰。要。す。き。ナ。よ。成。も。蓮。よ。朱。て。若。一。ノ。れ
北。湯。洋。曰。又。あ。は。す。わ。の。漢。う。一。キ。用。と。制。し。つ。之。だ。人。あ。せ。そ。○洋。曰
や。す。い。多。く。那。以。か。れ。す。も。か。あ。う。よ。れ。以。法。て。か。未。法。不。法。办。法。○不。易。流。行

○不。易。流。行

第一。堅。立

○仰。游。如。禪

丈室曰不易の句と幽時其体を好ててやらひ是と文流衍のゆとり。○洋曰不易ヒ
レハ字と彌てて。之語をひする。流衍ヒレハ。並あひ。度を以て汝不易流衍を知。ヒ
要す。而吃食立月寫前。到り。是。海。浪。風。船。上。前。○仰游コ王。○翁曰今
仰游。皆。比。ユ。ニ。を。號。席。玉。而。之。を。以。て。吐。ト。ム。既。す。落。す。不。行。ト。○仰游如禪。支考
曰。も。う。し。づ。仰。游。其。本。序。め。く。な。み。あ。り。ク。仰。游。仰。游。仰。游。仰。游。仰。游。
評曰。仰。游。之。本。序。も。仰。游。せ。ま。ト。之。仰。游。之。本。序。也。之。仰。游。之。本。序。也。之。仰。游。

ユ。立。て。序。を。出。あ。箇。ウ。是。柴。洋。奈。蜀。カ。是。祖。師。序。も。う。く。一。手。を。奉。す。遊。す
ト。風。風。も。生。よ。の。と。升。き。西。の。年。一。詩。す。り。う。婆。子。似。く。う。歌。の。東。○。や。游。
或。向。や。い。と。い。う。いた。わ。う。も。う。や。更。お。古。た。の。五。勺。や。の。字。考。ゆ。べ。
名。向。や。秋。り。そ。く。の。剽。ト。薄。を。出。す。扇。エ。額。白。や。扇。の。也。日。を。壇。根。が
○。是。交。並。生。後。の。う。法。す。○。洋。曰。一。揮。一條。の。痕。史。毛。古。辛。負。毛。も。あ。く。人。連
翁。苦。切。白。底。根。去。末。向。翁。苦。切。寄。也。性。烈。向。翁。苦。切。四。十。八。字。
各。字。也。洋。曰。立。向。翁。苦。切。百。字。指。良。放。收。殺。活。擒。縱。會。與。有。
舍。都。住。沙。等。頃。曰。○。向。上。一。游。の。翁。曰。仰。游。の。婆。リ。ヤ。一。之。て。
款。連。翁。の。ト。さ。り。こ。そ。心。ハ。向。上。一。游。ユ。於。更。を。曰。の。字。仰。游。空。眼。

○昂。游。

第。並。上。云。

○俳諧
俳諧列行

○春秋
眉並毛

評曰よくぞの如く余せ、ゆでる。俳諧の袖山よりあ長きよとの頃曰の白鷺三千丈、縁愁似獨長戸を下すと云ふ。眉のそれねば、急ぬは師故、かくまくおのれの如きや、みその、有眼も晦もちに餘の音の句件の善悪、かくまく尚を曰風に千度万代をとつて、ゆけ野キ輕キ懶た、かくまく厚キ用ひ和た強解、かくまく懷達かこの如きよ。純キ濁弱、重キ薄混、かくまくタキ堅強、かくまくかろこときハ悪堅きらくどんある。匂ヨシ呑西あべ。○評曰俳ゆくの如く余すと皆雪ウ如來て痛痒と處するすあくろとあくに金屑貴しとソリモ眼コ入て、かくまく乃骨筋アホ已付て、かくまく松花の子。但一仏成及初見法界草木國土選皆成仙トハ仮語コ接付ト推存すと云う。○評曰ソリソリトモ眼コ入て、かくまくま獨モト色空す間の人と道揖せぬ。○頃曰、南無大いのい、酸く甘く、かくまくソリモ白附金の变化の如き、かくまく料理のうまくあくまく走く。○評曰御御、かくまく老小少と見どゆく時、かくまく身の御経タレモ是とて、かくまく此しむ拘管、かくまく年々内申れ、かくまく御復のと短一卷の序改え句の変化緩急のみ全之左し。○評曰老渾、益コ箇又東と否人をもつて、かくまくま歎の漏、かくまく或向ま秋のす俳諧の深碧は、かくまくたまよや英太白油素秋のすとぞと。

道シカツ

○俳諧三鳥

或人更登エ和琴三鳥の聲を乞ひ曰かくトケふくニモ、かく亭は立はとトナ五のよく知る事、かく歌は交ふが俳諧の三事。かくはとゆゆめし本すすめ、其石自たよかく、かくあり。○此つ多年の知つて、かく本と見て芭茅曰、かく評曰汝清人群をもし、かく歌を歌りし、かく聲をひねり、かく扇とひふじ、かく飲とぞ、かくて、かく歌を後し、かく妙を説く、かく歌一すを拳まし、かく口喰に知るも、かく底どて未小底へうらばべ、かく三十年のほ我骨と換て出来る、かくとゆゆめ、かく却てゆふ向て追今り我あり、かく西行とゆすあられ便ナト嘘

物々や御工俳諧の室地と、かく口の油燐、かく自立とゆて、かく眼とゆる三年以上、かく白なき、かくとあて、かく始て、かく若志、かくうじ、かくお高木と見て芭茅と考へ、かく評曰汝清人群をもし、かく歌を歌りし、かく聲をひねり、かく扇とひふじ、かく飲とぞ、かくて、かく歌を後し、かく妙を説く、かく歌一すを拳まし、かく口喰に知るも、かく底どて未小底へうらばべ、かく三十年のほ我骨と換て出来る、かくとゆゆめ、かく却てゆふ向て追今り我あり、かく西行とゆすあられ便ナト嘘

ひて追ひよは經とおひて至れり推移へ大苦惱と立つ人の如くは熱鍊丸
を呑みぬく時はすも吐けぬ者やと呑みぬる胸膈熱向一陣せり啞子の差力
足ちる如く中てあつゝ始てば正法服衣を身に着せん或曰更登三鳥の因を
ありてニモのまこと傳するいめ所曰汝もほら門も入しのゝをめにれに五
と二の間はさあすは是草をわざて蛇とかどろぬ甚の文出らん
曰子うえよのエヌ禪あらうするあきや日禪を尊むれ他と尊むれを
考まれる御を尊むれは御法とあるすあれ
同あやきつも上の夜の面地の人物はいはく疫といふと聞矣し

評曰主計て三十枚金済すし三十枚りんの犯と通せり

卷右誤り

右仰詣奉の対接華

夢大門

馬江坊前腰評
雪中高麗太頃

○表

三代人あら敷奏と云奉改る表と云漢又是よも漢書

筑波根の法豆尔 太空ニシテ

韻如引ラ四六トテ 表ハ上帝へ願奉る時ニ文章それと我輩工用ナムア
あははハ小ど花の聲コ禮繕キナリ雨を晴らシたゞ承ひ應の葉玉而ヒヨ
敷ひシルモ表矣アホヘ承ひまもゆきそしてアサ苗植はめ百乞の表せぬ見の
子あがねと苗ハそれく上よりあらりけり御軍ナリヤハカムアシキ

○露布

勝軍と天下へ出候あらまき

元魏攻滅了然ひるを経書はて漆

牛の上(伏天)下(走)一めーと神事もまくら公の御事と我軍工用ナムア
ば花オノメモ由を経是モ一極木ナリユナガルトヨミヒヨコス戯る事モ我軍

乃文幸

○論

漏ハ亥の時世成リ人のりやまうあらまうゆめん人をけり王常ヨソ論

不能事
やう事

○詮

侃(上)とあらまゆニシテ
侃(下)とあらまゆニシテ

○辨

詮(上)とあらまゆニシテ
詮(下)とあらまゆニシテ

○解

解ハ古(上)あるのまをの(下)とけりと解わるを云はば(上)と云はば(下)

○序

詩經太序の始一毛り六義をの(次)は賦比興の変也るよも(又)政教
化もを(も)て次(ア)とよく立て(ル)て序と云ふたとえ、並て(ル)て(ル)

次(ア)とよ(ア)理(ア)ある(ア)事(ア)べて(ル)て(ル)す(ア)い序の体(ア)あ(ア)べ

○跋

跋ハ一卷の中(ア)よ(ア)き(ア)あ(ア)を(ア)參(ア)す(ア)か(ア)と(ア)後(ア)の(ア)体(ア)と(ア)と(ア)大(ア)き(ア)世(ア)跋

序 ひくくとて原やまくり序といだまよ

○記 山あは遊の記画とてその記人の苦悽の出来をもよおせとて記とてよつて
年月と経て冬とあるとぞれぬためよかの也 その内みに極てかへむかうが美
福あひ一端のあらわし

○紀 時のすまをめぐらすよくわる私すきを記とて先へ日を紀と紀引とよす
寔すかたもそれと神武を皇すけの天より氣筋のめよく傳けま
紀とよそて御引じ口を橋もくあはる筋のとくせに紀

○傳 ほり其人の事あらざとくじくちやくと生る祖系圖すま度すと本を
行狀 行狀の時そのよきよきを無上おちぬふ傳の如くとくぢゆ

○碑 著の宮室と何れまほりを犯よぬる大狂とつむいため立てる碑 日時斗
碑始す共碑す平宮の碑とおと見碑の文多也切替の碑行狀の碑行狀の碑

跋記の碑ハ妻の碑也今墓(達)碑行狀の碑也あまよ大狂と太宰牛
羊歎此三つの生のとつあり金此のち神也(てまよ)

○説 魯ノ哀公孔子の深をつくる所也(其説曰)

得中屏(官)余一人以在位荒蕪余在疚鳴呼哀哉尼父(事ナ)物淋敷

説は累の心也其のよき行狀を累上りて莫人を悲すよひを(もみ)

説

○哀辭 説は似て説服も唯あても詠集のとぞ

○祭文 あは祭文曰多聞君友すもれ我又何ぞソニモ一禮あひてづ我是
死は書子を却て念とあるあんア若此云祭少や否や而食い利あるが
文の云ああア至人生活のよきよのよきとくらど其文の云祭ヨモキモツラ
をうけよとよどりとおきと仍希くいづけよとほれ文章のあらうけもち
ほくはしも次第有高食上と末食早食其外(1)仍而其と夫々しスうけよ
とふの章中あらわしきよとおきとよ)

○風 風候の風と振りと義理と人情とよれてはるも風あるねこ風を心
のあはるのちれを心もくらむくことあはし

○賦 姿をよくスミ姿の兎を振りとふの賦とて嘗や者をうなづかせり
遠する川底にほてよく姿の姿を振りとて賦とぞ

○比 美あひ時面をあしと姿又はぬ故に一聲與何せ由其事するよたう風とよ
遠する川底にほてよく姿の姿を振りとて賦とぞ

○雅 あひ時面をあしと姿又はぬ故に一聲與何せ由其事するよたう風とよ
の要をもじきて下さりて天子(差)を猶とふの作とすもの仰る
すりてあるし

○頌 雅頌と我事云ひ思あまこととあこせ事一亦布表ふとのたひ

あなたうじゆめとよま、あくび頃はと神をなまし其神體を仰ぎまつてお
日老子を差あまの木の花のもの等頃はあらわれ神
お對て、何れか考證しよしとくと申別頃ある、いそい書調歎

七部集解 翠兄撰

蓼太門金匱庵

升六八般波ノ人文化元甲子本名夏タリ其時代現世ナシ

翠兄文政年中近右生現在ルシ

右ノ源本書誤多キ字也勘考して誤を訂正し、字といふも解し、うねりの其
怪にて字也紙版立本を今縮てめがさす四月八日す、十四日止、七日又上早リ、
雪中房暮太翁の傳を翠兄著ニ既の説を加テ、(井)井更の説も載テ、又
大鏡文政年仲九月大鏡引手桺山屋等のゆセ、載たつを考へ、文化より文政之初の次若たゞまつ翠
兄の宣るはその今まづくと地名、俗姓知れぬ、予既書は捷て加置キ乃

明治十四年八月

大陰曆七月

立秋節残有落葉立

後當字清書可致

金牛舍鶯雅

古稀前年夏

九筆ヲ以テ書昌写



